

# いわゆる「作為動詞」について

—その Wortstand との関連を中心に—

菅 谷 泰 行

## 1

普通、形容詞から造られた動詞については、他動詞である「作為動詞」(Faktitiva) に対して、自動詞である「起動動詞」(Inchoativa) が大別される<sup>1</sup>。起動動詞には、-(e)n によって動詞に転換された *dunkeln, faulen, reifen, welken* と言った語の他に、接頭辞である *ver-*, *er-* を伴った *verblassen, verdummen, vereinsamen, verstummen* ; *erblinden, ergrauen, ermüden, erwachen* などの動詞が挙げられる。更に、同じく形容詞から造られた自動詞ではあるが、起動動詞とは別の語群として、状態表現を特徴とする少数の動詞が造られている。*ähneln, blauen, kranken, lahmen* と言った動詞がある。この動詞の中には、同一の形容詞から造られながら、ウムラウトを手段に作為動詞と対照をなしている動詞もある。*blau—blauen—bläuen, lahm—lahmen—lähmen*。形容詞から造られた動詞はこの三つのグループに類別されることが多いが、このような分類の仕方は、全体に、そのグループの動詞の内容を *werden, sein, machen* を使ってパラフレーズできると言う考えに基づいている。つまり、起動動詞は *werden*、状態表現の動詞は *sein*、作為動詞は *machen* によってその内容が表現されることになる。*erröten—rot werden, kranken—krank sein, vertiefen—tief*

machen. しかしながら、このような対置が必ずしも常に可能であるわけではなく、これらが相互にもつ内容的価値を見比べるならば、両者の間には差が認められ、完全に内容が一致するとは考え難い。とりわけ、多様な派生の形式によって豊富な内容を表現する作為動詞のグループについては異論が出る。まず第1に、作為動詞が持つ転義的な意味内容が問題になる。更に、転義の意味の問題も、その接辞などとの関連で、「動作体様」(Aktionsart) やアスペクト (Aspekt) と呼ばれる範疇との係わりの中で掘り下げられねばならない。作為動詞については、通時的には W. ヘンツェン (W. Henzen) の研究<sup>2</sup>があり、共時的には J. エルベン (J. Erben) やドゥーデン文法<sup>3</sup>の一般的な記述があるが、作為動詞の内容に関しては十分に説明されていない。L. ヴァイスゲルバー (L. Weisgerber) は早くに Wortstand (以下、WS と略す) を基点に作為動詞の内容的考察を試みている<sup>4</sup>。拙論ではこのヴァイスゲルバーの研究を振り返りながら、造語手段、特に接頭辞の働きと基幹語である形容詞を観点にして、作為動詞がもつ内容を中心に考えてゆきたいと思う。なお、用語に関しては、faktiv と kausativ という二つの概念を区別する必要があるだろう。この二つの用語については意見が一致していない<sup>5</sup>。しばしば広義に解釈し、区別なく同義的に扱うことも少なくない。ここでは、ヴァイスゲルバーに従って、この二つを区別して、両者は共に目的語に対する「作用」(Bewirken) を内容とするが、動詞から造られたものを kausativ と規定し (trinken → tränken)、作為動詞については、形容詞から造られ、基本的にその形容詞の意味内容が目的語に及ぶ動詞と考えて扱ってゆく<sup>6</sup>。

## 2

まず、WS と Wortnische (以下、Nische と略す) というヴァイスゲルバーが造語の内容研究の中心に置いた二つの概念<sup>7</sup>から始めたい。ヴァ

イスゲルバーの理論体系では、考察の対象を四つの段階に置いて解明しようとする方法論が試みられる<sup>8</sup>。その4段階の言語考察の中で、言語の形態的研究から内容中心の研究への移行過程で中心的役割を担う概念の一つが WS である。言語の内容研究では、その有効な手段として生まれた「野」(Feld) の考えは今日既に独自の発展を見せているが<sup>9</sup>、WS はこの「野」に対する対概念として造語論の領域に置かれている。この点で、WS が持つ性格は、造語を対象としながらも、言語の語彙が持つ内容上の構成を強く意識したものであると言えよう。一口で述べれば、WS は派生語や合成語などの意味論的なグループ化の試みである。接辞の意味や機能はそもそも明白とは言い難く、客観的に確定することが難しい。例えば、be- という接頭辞が常にある一つの内容のみを表示すると言ったように、形態面と内容面が単純なパラレルを供するものではない。WS はそのような接辞の働きを統一的観点から秩序付け、明確化しようとする。つまり、接辞のような単位を考察の対象にした場合では、その基幹語などとの関係は無視できないと思うが、この点で、ヴァイスゲルバーは接辞と基幹語との意味内容上の関係を基礎にし、その下位区分を行なうことで、接辞の働きを形態面ではなく、むしろ内容面から規定しようとするのである。言語の内容面に関して言えば、個別言語がもつ内容は、まず第一には、それを構成する個々の意味領域によって輪郭を描くことができるだろう。造語論の方面でも、例えば、「職業」を表わす語群 (Bäcker, Künstler, Gärtner など) を好例として挙げるができる<sup>10</sup>。これらの語はその他の多くの語と共に職業という一つの意味領域を構成していると述べることができ、内容面で統括し得る語群となる。造語の形式を観点にすれば、確かにこれらの語を造り出した派生手段は相互に異なる (-er, -ler, -ner)。しかし、意味領域の構成に関しては、同じ一つの働きの中にあると言えるのである。また、これらの派生手段がそれぞれ個別に他の異なる働きを持っているとしても、この場では職業表示の点で限定的な働きのみを示していると考え

ことができよう。WS はこのように言語内容の構成面を考慮しながら、造語を形態面ではなく、むしろ内容面からとらえ、接辞などが持つ働きを規定しようとするのである。Nische とはこのような規定の中で内容面からとらえられた派生形式を指す。例えば、接頭辞である er- を伴う複合動詞の中に「生命の剝奪」などに関して一連の語が造られている<sup>11</sup>。*erfrieren, erhängen, ermorden, erschießen, erschlagen, erstechen, ersticken, ertränken, ertrinken* などの動詞がある。これらの動詞が持つ接頭辞 er- を一つの Nische として包括できよう。WS と Nische の関係については、WS は Nische の上位概念であり、WS を基盤に Nische は成立すると言える。だから、合理的には、WS は接頭辞などを Nische に分類・整理するための規準であり、形態的に異なる造語を意味論的な面で一つの統一的観点から考察するための手段であると述べることができよう。ただ、ヴァイスゲルバーは理念的な色彩を濃くした表現をもって、個々の異なる派生形式が内容的に共通する一つの方向に向かって収束する関連点 (Bezugspunkt) が WS である<sup>12</sup>、と説明している。意味領域を形成するために関与した派生形式の相関した働きと、その諸形式を一方向に統括する言語の原理的側面が配慮されたものとも思えるが、意味内容を中心に造語を解明し、同時に、その背後にある言語の精神的側面を考察しようとする姿勢を見ることができよう。

さて、ヴァイスゲルバーはこの WS を観点にして、いわゆる作為動詞を考察する。当然、その内容面が考察の中心になる。ここではその背景を考えてみたいと思うが、研究の動機には2面が指摘できるだろう。一つには、造語手段と基幹語である形容詞との関係があり、次にこれと関連して、作為動詞は「作用」を内容とする動詞であるという点が重視される。H. ブリンクマン (H. Brinkmann) はこの動詞を人間の能動的活動の所産としてとらえ、作為動詞は、世界がどのように現象するのか、そのあり方を根源的過程から導き出し、人間の作用領域を言語を通じて拡大しよう

とする動詞である<sup>13</sup>、と述べ、その言語的背景を推察している。この洞察はヴァイスゲルバーの出発点でもある。ヴァイスゲルバーは派生動詞などの新たに産み出されたドイツ語の他動詞を八つの主要な WS に類別し、その相互の個別的な様態を考察すると共に、所謂、ドイツ語における人間の「4格目的語化」と、物の「道具化」の現象を解明しようとする。即ち、言語を通して行なわれる人間の目的語化と事物の道具化、手段化の言語事実を派生動詞や複合動詞の造語の中に突き止めることで、ドイツ語におけるその適用範囲と、更に、その背後に仮定し得る言語の「作用する力」を考察しようとするのである<sup>14</sup>。ヴァイスゲルバーはこのような視点から、作為の観点に集め得る動詞を一つの WS に設定したのである。もちろん、このような内容を客観的に確認することは困難であろうし、問題も指摘できる<sup>15</sup>。ただ、ここで問われるのは、その派生的手段、特に接頭辞がもつ働きであろう。明らかに、ここでは4格目的語を支配する単なる文法的機能としての他動詞ではなく、その内容的価値から見た他動詞化の能力が問われている。この点で、作為という観点を基本的に問題提起すべきだが、まずは、そのような内容的価値は接頭辞によって強調されると言ってもよいだろう。歴史的に見ても、接頭辞の補完を受けない -en によるだけの派生形式は生産性の面で後退しているし、それに平行して、接頭辞を伴った結合形式の増加を指摘できる<sup>16</sup>。本来の作為動詞に更に接頭辞が付加される場合も少なくない。多くの競合形式を挙げることができる。festigen—befestigen, feuchten—befeuchten, einigen—vereinigen, stärken—verstärken などである。接頭辞は当然動詞が持つ内容を識別させる役割を持つ。そこでは語内容の差異が生まれ、同時に、相互に異なる目的語を取る結果となる。目的語の異同は統語論上の事実として確認することもでき、意味論的に動詞の内容面の発現をそこに考察することもできる。この点で、ヴァイスゲルバーが対象とした人間と事物の適用範囲は接辞の考察に具体化される。例えば、festigen と befestigen の区別に

ついて、ヴァイスゲルバーは、「befestigen は人間について余り使用されず、festigen は町に利用されることがほとんどない」<sup>17</sup>と述べ、接頭辞である be- に「完了的」な働きを認めている。このような接頭辞の解釈が、所謂、動作体様、アスペクトの範疇を基礎にしていることは言うまでもない。この点で、作為動詞とその WS は語彙論的な範囲にとどまらず、動詞の内容が含む時間性との関係で考察されねばならない。もとより形容詞から造られた動詞の大別もこのような観点に基づくものであるが、以下に若干の概観をしておきたい。

動詞は一般に時間性を含み持ち、それに基づき「過程」を表現すると考えられる。即ち、動詞は概念的な意味内容と共に、その基本的な意味内容の一部として時間性を有していると述べるができる。動詞の内容としてのこの過程は更に「状態」と「動作」に区分できるが<sup>18</sup>、接頭辞に関して述べれば、接頭辞は動作・行為の経過を時間的限定性の中でとらえ、動詞が表現するその過程にアクセントを付けるものと考えられよう。もちろん、どのようなアクセントであり、また、ニュアンスの差であるかが問題なのだが、一つの規準として動作体様の設定がある。この点で、動作体様とアスペクトの区別が必要だが、自明でないことも確かであろう。動作体様にしても幾種もの分類がなされており、理解を困難にしているように思う。しかし、両者の基本的な区別について考えるならば、動作体様は客観的であり、アスペクトは主観的であるとする解釈が一般に承認されていると言えよう<sup>19</sup>。即ち、表現される事態の客観性と表現する話者の主観性、この2者の関係を中心に見た場合、動作体様では、話者がある事態や行為を表現する時、その事態の客観性は話者に対して支配的であり、話者はその事態を受け入れ、再現できるにすぎない。つまり、動作体様は「話者が言語表現しようとする事態の事実性そのものから決まって」<sup>20</sup>おり、話者の自由な選択には任せられていないと述べるができる。これに対して、アスペクトでは、話者は選択の可能性を持つ。つまり、話者は表現

すべき事態の客観性を受け入れながらも、発話状況の中で、その事態を表現する形式を選び得る。同一の事象に対する異なる見方が問題となる。そのため、両者の関係としては、動作体様はアスペクトの前提と見なし得るものではあるが、ヴァイスゲルバーも、動作体様を「行為そのものの経過に基づく特徴」<sup>21</sup>と定義し、他方、アスペクトの範疇を行為の様式である *Sehweise* に結び付ける。つまり、動詞がその内容の一部とする時間性に基づき表現する過程に何を観て、何をつかみ取るかという一つの様式をそこに探ることになる。言うまでもなく、言語の中間世界を重視するヴァイスゲルバーにとっては、客観的な外界と主観的な人間との間に行なわれる「世界の語化」が大切な考えとなる。言語を通してつかみ取られるのは外界の事象そのものだけではなく、人間の眼に写った事象でもあると説明できよう。この事象観は特定の様式として言語に収められる。動詞についても例外ではない。語彙の構成面で各言語の間に差を観察することができるが、行為や事象の経過は単に一般的経過としてとらえられるのではなく、ある局面の強調、判断の介在といった形で動詞の内容に収められ、言語はそこに内容上の差と共に、言わば、精神的な「把握」(*Zugriff*)を具現化する<sup>22</sup>。ヴァイスゲルバーはそのような言語的背景が開示する可能性を考察しようとする。ドイツ語では一般に造語や副詞の付加などがアスペクトの範疇に関与するが、ヴァイスゲルバーは、この点で、特に動詞の造語形式の内にそのような言語内容の具体化を求めるのである。このような観点からすれば、作為的な *WS* を構成する個々の造語手段は、内容的観点から見た、つまりは *Nische* として特定の「物の見方」を開くための手段と解することもできよう。ただ、ヴァイスゲルバーはアスペクト理論における「完了」の範疇を下地に、既に触れたように、接頭辞の *be-* などにはっきりと完了化の作用を認めている。この点、ブリンクマンはドイツ語の接頭辞を手段にした造語に対して、一般的な通用性を持った「完了」、「未完了」の二面的対立を適用することを否定している<sup>23</sup>。ブリンクマンは、

ドイツ語の接頭辞が開く独自の *Sehweise* として、「開始」、「変化」、「持続」、「完全」、「成果」、「獲得」といったものを挙げている<sup>24</sup>。作為動詞がこの中で「変化」と深く関係することは言うまでもない。

### 3

具体的に見てゆけば、作為動詞は接頭辞、接尾辞、ウムラウムを手段に造り出される。接頭辞では、*ver-*、*er-*、*be-*、*ent-* を中心に、更に、*ab-*、*an-*、*auf-*、*aus-*、*zer-*、*ein-*、*über-* などが利用される。接尾辞では *-igen* (*-ig-en*)、*-ieren* などがある。*-igen* は接頭辞を伴うことが多い。例えば、*be-igen* がある。また、この動詞が持つ独自の形式として形容詞の比較変化から造られる *-ern* を挙げることができる。これらを利用して作為動詞が造り出される。方法論からすれば、WS の考察は派生形式の収集に始まり、次に、集められた語群を派生・合成のタイプに分類・整理し、内容面で吟味することになる。もちろん、接頭辞を伴わない作為動詞の数も少なくない。*weißen*、*schwärzen*、*röten*、*bläuen*、*bräunen* といった色彩表示の語などは特徴的であろう。また、動詞が表現する動作過程は動作体様から見て、「時間線上で何らかの延びを持っているか否かにより、線的な動作と点的な動作とに二分できる」<sup>25</sup> が、この点からすれば、*wärmen*、*kühlen*、*breiten*、*weitern* の語群と、*töten*、*schwängern*、*blenden*、*lähmen* などの語群は類別できよう<sup>26</sup>。このため、単純な派生動詞も決して無視できないが、ここでは接頭辞を伴った語を中心にして、内容面から作為動詞を見てゆく。多くの例を提出することはできない。比較的の特徴的と思えるものを挙げておく。接頭辞の解釈についてはヴァイスゲルバーとブリンクマンを主に参考にした。ただ、最初に規定したように、形容詞から造られた他動詞がすべて作為動詞ではない。基幹語である形容詞の意味内容を中心にして、例えば、*vereiteln* のような語は形容詞から造られた他動詞で



あるが、形容詞である *eitel* が表現する状態に目的語を置くものとは考え難く、作為動詞とは見ない。

ver- : a) *verdichten, verflüssigen, verdünnen, verdicken, vertiefen, verdunkeln, verbilligen, verteuern.* b) *verweltlichen, verstaatlichen, verbürgerlichen.* c) *verändern, verbessern, vereinigen, verfälschen, verkunden, verstärken.* d) *verfrühen, verspäten, verniedlichen, versüßen usw.*

er- : e) *erheitern, ermutigen, erfrischen, ermüden, ermuntern.* f) *ermöglichen, erschweren, erleichtern usw.*

be- : g) *befeuchten, beschweren, befestigen, benässen, bereichern.* h) *begütigen, beschönigen, besänftigen, beruhigen, belustigen, beseligen, bereinigen, berichtigen, befähigen usw.*

ent- : i) *enthärten, entfestigen, entschärfen, entmutigen, entheiligen.* j) *entfernen, entleeren, entfremden, entblößen usw.*

ab- : k) *abrunden, abstumpfen, abflachen, abkürzen, abhärten, abplatten usw.*

-ern : l) *bessern, mindern, mildern.* m) *verlängern, vergrößern, verkleinern, verbreitern, verengern, verbessern usw.*

過程という動詞の内容的価値を中心にすれば、形容詞から造られた動詞が表現する動作過程は「変化」と「作用」の二つのモメントにとらえられると考える。動詞の内容、つまりは基幹語である形容詞の内容が表現する

状態への変化と作用である。作為動詞では、この変化と作用は動詞が表現する過程を通して、対象である目的語をある状態に置くことになる。個個に見てゆく。

まず ver- だが、形容詞から造られた動詞については、この接頭辞が最も多く利用されている。接頭辞 ver- は形容詞の性質に適合すると考えられるが、ブリックマンはこの接頭辞の特質として変化を強調する。つまり、動詞が表現する過程で行なわれた変化を鋭く指すものと指摘している<sup>27</sup>。a) の動詞では具体的事物が対象となり、目的語は明度・価値・事物の形状などに関して形容詞の性質を獲得する。また、この接頭辞は広範囲な意味を持つ形容詞に対しても使用される。b) の動詞を例示できるが、ver- の一つの特徴として指摘してよいものだろう。一般に接頭辞 ver- は「強度」を観点に説明することができる<sup>28</sup>。動詞が表現する行為の遂行を強調するものである。c) の動詞はそれぞれにこの接頭辞を伴わない作為動詞と競合している。競合の結果はまずは目的語の異同に探ることができるだろう。stärken (das Selbstbewußtsein)—verstärken (Mannschaft), fälschen (Urkunden)—verfälschen (einen Bericht)。接頭辞 ver- がもつ強度の行き過ぎとして解釈されるのが語義の「悪化」である。ver- を接頭辞にする動詞には否定的な内容を有する語が少なくないが、ブリックマンはこのような場合の接頭辞 ver- が持つ働きを言語社会の価値評価の体系と結び付けて解釈している<sup>29</sup>。つまり、時間・所有・目標・倫理などに関して、期待された方向からの逸脱を表現すると言う。d) のような動詞を例示できる。次に er- については、ヴェイスゲルバーはこの接頭辞を作為動詞に対する生産的手段と見て、同時に、「結果的」要素を指摘している<sup>30</sup>。ブリックマンは er- を手段とする造語の特徴として、三つの点を挙げている<sup>31</sup>。つまり、1) 対象に何か新しいものを付与し、2) 成果への方  
向に導き、3) 実現化させる働きを er- に認めている。一般的に言って、blühen (咲いている) と erblühen (咲く) の対照に観察されるように、

開始点・終止点の強調をこの接頭辞に見ることができると思うが、この点で、他動詞である 作為動詞に付加された er- にも起動的なニュアンスを読み取ることもできよう<sup>32</sup> er- を手段にした作為動詞では人間への作用を内容とする動詞が目につく。e)のように人間の心理的・情緒的状态に関する動詞がある。erhöhen に対する erniedrigen のような動詞もあるが、形容詞の内容としてはプラス価のものが際立っている。また、対象への作用と解するには弱く、人間が行動を行なうための前提を立てるような動詞もある。f)はそのような動詞であると思われる。ver- と er- との境界は明確でないと指摘される<sup>33</sup>。ブリンクマンは、形容詞から造られた動詞では、新旧の対立する状態の中で、変化のモメントが作用のモメントよりも強く感じられ、接頭辞としては、ver- と er- が適合すると述べる<sup>34</sup>。しかし、その区別については明確にしていない。ヘンツェンは、行為を頂点にまで導くのが接頭辞 er- であり、これに対して、接頭辞 ver- は適度な段階での成就を内容とすると考察している<sup>35</sup>。十分に意識される区別か否かは疑問だが、ただ、この ver- の段階性の指摘は後述する比較変化 -ern との形式に確認できると言えよう。次に、接頭辞の be- を伴った動詞に移れば、この動詞はヴァイスゲルバーが最も力点を置いたところである。この接頭辞が他動詞化の能力を強く押し出すからに外ならない。接頭辞 be- は、この点で、ver-, er- と明らかに区別することができる。be- は位置の変化に作用しないと言う<sup>36</sup>。位置の変化を表現する動詞に対してはその内容を変える。stellen—bestellen—verstellen。ブリンクマンは概念の「現在」という点を強調する。つまり、be- は、現にそこにあるものを前提とする<sup>37</sup>、と述べられている。ヴァイスゲルバーも接頭辞 be- に完了化の機能を考察しながら、be- は「静止の印象」<sup>38</sup>を与えると述べている。be- を伴う作為動詞を特徴付けているのは「装備動詞」(Ornativa)との重複であろう。装備動詞は名詞を基幹語とし、内容上、目的語を何かで装備し、目的語に何かを付加する動詞を指す。例えば、bewaffnen (武装させる)の

ような動詞である。ただ、装備動詞は確かに目的語に対する付加を表わす動詞のことであるが、内容的には *ängstigen*, *peinigen* のような人間の内面への作用を表わす動詞も含まれる。そのため、内容面で規定し難く、装備動詞とも作為動詞とも解し得る動詞が出る。例えば、*ermutigen* のような動詞の場合、その配属は十分な論拠をもって決定し難い。ヴァイスゲルバーは装備動詞を作為動詞と並んで一つの WS に集めているが<sup>39</sup>、両者に関係する動詞は少なくなく、WS 相互の重複を生み出していると言える。そのような動詞は、作為動詞の場合、be- を伴う動詞に多い。g) の語がそうである。この重複は -igen 動詞とも関連する。-ig は形容詞の語尾として特徴的であることは言うまでもないが、作為動詞が造り出された時、*demütig—demütigen* のように、接辞 -ig が既に形容詞に含まれている場合が多い。しかし、このような -ig-en の形式ではなく、若干ではあるが、*rein—reinigen* のように -igen の形式によって派生する作為動詞を認めることができる。この両者を区別する必要があるか、また、接尾辞 -igen に内容的価値を認めるかは造語を内容から見るとは解決しておくべきことである。ヴァイスゲルバーは、本来の -igen と、そうでない非本来の -igen を区別しているものの、-igen の形式に内容的価値を認めてはいない<sup>40</sup>。-igen 動詞は多くの場合伴った接頭辞によって規定されると述べてよいだろう。ただ、h) のように、be—igen の形式は人間の精神面などに関する動詞が際立っており、これは be—en の形式には見られない特徴として指摘できる。装備動詞である *bewaffnen* に「除去的」(privativ) な動詞である *entwaffnen* (武装解除する) が対照を成すように、作為動詞に対しても ent- を対置することができる。i) の動詞である。ヴァイスゲルバーは古くに造られた作為動詞では *erleichtern—erschweren* のように語幹から見て対照を成す語が多いが、新しく造られた語では ent- によって対置される、と指摘している<sup>41</sup>。*verstaatlichen—entstaatlichen*。この除去的な ent- は「対抗過程」のシグナルとして働いていると言われる<sup>42</sup>。だから、

この接頭辞は状態への移行ではなく、その放棄を表現する<sup>43</sup>。そのため  
除去的な *ent-* は他の作為動詞と対照を成す。単純な作為動詞に対して  
と同様に、接頭辞を伴った作為動詞とも対を成す。*schärfen—entschärfen,*  
*ermutigen—entmutigen.* j) の場合、接頭辞は i) とは全く異なった働きをして  
いる。作為動詞では若干の動詞が挙げられるだけだが、この動詞では形容  
詞が表現する状態への移行を目的としており、接頭辞 *ent-* はその強化  
の役割を果たしていると考えられる。ab- についてはヴァイスゲルバーは  
指摘にとどめている<sup>44</sup>。ドゥーデン文法などにも例は見られなかった<sup>45</sup>。  
k) のような動詞がある。作為動詞に付加された *ab-* の特徴は「分離」を  
あまり表現しないところにあるだろう。対立する状態からの方向が表現さ  
れる<sup>46</sup>。最後にこの動詞が持つ独自の形式として形容詞の比較級から派生  
した -ern が挙げられよう。l) の動詞の他に、m) で示したように、*ver-*  
*ern* の形式が印象的である。m) はこの動詞の明確な *Nische* を構成して  
いると言ってよいだろう。変化は比較の観点を持つと考えられるが、相対  
するそれまでの状態との対比の中で、新しい状態への変化を形容詞の比較  
変化 *-ern* はよく表現している。この *-ern* と接頭辞 *ver-* との適合性は  
顕著な事実であるが、この点から見れば、ヘンツェンの言う動作の段階的  
強化としての *ver-* の働きが比較の観点に一致点を見出しているとも推察  
できるだろう。その他に接頭辞では *zer-* があり、*zerkleinern, zermürben*  
の 2 語を挙げるができる。更に、*über-* (*überfüllen*), *ein-* (*einfeuch-*  
*ten*), *durch-* (*durchfeuchten*), *aus-* (*aushöhlen*), *an-* (*andicken*), *auf-*  
(*aufheitern*), *nach-* (*nachtrocknen*), *unter-* (*unterkühlen*), *-ieren*  
(*halbieren*) などがあり、作為動詞は形態的には多種の形式によって造り  
出されている。

包括的な記述に過ぎないが、目に触れた語について述べてみた。WS の  
観点から作為動詞を考えた場合、それらは確かに作為の方向に集められた  
語ではあるのだが、何よりもまず、その形態的な多様さが目に付き、必ず

しも統一的な感じを与えない。最初に述べたように、WS は言語体系の内容上の構成を強く意識したものである。Nische が内容上の差異に基づき構成されるところには、基幹語との内容上の関係が存在すると仮定でき、その意味内容の関係そのものが Nische の上位概念である WS を成立させる土台でなければならない。この点で、ヴァイスゲルバーの研究では、作為を観点に、一方では、kürzen—verkürzen, leeren—entleeren などの対照を成す語を対置して、この動詞の内容的な差をより鮮明にすることに努め、他方では、ermutigen, erheitern と言った一連の人格などに関する語が存在することを指摘し<sup>47</sup>、そこから、どの接辞を適用し、どのような形容詞が他動詞化され、どのような範囲に作為動詞が造り出されているかを考察しようとしている。しかし、まず WS の重複は既に装備動詞との関係で触れたように拭い取ることができず、作為動詞の WS に収束する統一的な Nische という考えは十分に徹底できない。これは、WS を一つの方向の中で派生形式を内容面から分類・整理する試みと解釈するならば、まず、作為動詞を造り出す接辞が個別に統一的な働きをしているのか、あるいは、更に意味論的に下位に区分できるのかという問題を提出することにもなる。ver—ern, be—igen, ab—en などは内容的にかなりの程度で作為動詞との関係をにおわせているが、be-, ver-, er- などは作為という内容面からだけでは規定し難い。これは接頭辞を一つの単位としてその機能を考えた場合の難しさであるが、WS との関連で言えば、形態的考察から内容的考察への移行過程の中に設定されたこの概念の持つ性格をよく示すものとも言えよう。

最後に「語野」(Wortfeld) との関係について触れておきたい。それは、ヴァイスゲルバーが WS を語野の対概念に設定することで、造語の現象を言語がもつ語彙の体系からどのように説明でき、また、造り出された語が再び語彙の中に体系付けられるものであるかという点に、視野を開いていると思えるからである。

作為動詞の内容上の規定は、基本的に基幹語である形容詞の意味内容に基づく。内容上の統一体である WS も同様である。作為動詞は、人間や事物を形容詞が表わす状態へ移し変える動詞である。その内容を基本的な図式で示せば、次のように表わすことができるだろう<sup>48</sup>。

主語—動詞—4格目的語—述語形容詞

⇒主語—基幹語（形容詞） $\left\{ \begin{array}{l} \text{-en} \\ \text{-igen} \\ \text{-ieren} \end{array} \right\}$ —4格目的語

このモデルに従えば、作為動詞は *machen* によって書き換えることができる。しかし、作為動詞の内容が全て *machen* によって汲み取られるかは疑問視される。作為動詞の語義上の変異が *machen* によって表現できるかという問題である。辞書の記述に見られるように、作為動詞の場合、その語義は *machen* だけでなく、形容詞の意味内容からして、語彙的に親しい動詞によってより明確にすることができる。*kürzen* → *kurz machen / schneiden*, *leeren* → *leer machen / gießen / schütten*. 語義の変異はその文脈的制限にも左右されるが、語が本来持っている内容的価値の表現でもある。確かに、作為動詞の大多数は *machen* によって書き換え得ると言ってよいかもしれない。*machen* は比較的に無色な動詞であり、広範囲な目的語を取ることができる。しかし、個々の動詞が持つ内容的な色彩は、当然、目的語の異同によって現れる。*machen* は目的語の差となって現れる個々の語の内容的価値を表わす動詞ではない。具体的には、*machen* は形容詞と一つになって、初めてその動詞の意味内容を表わし、目的語を規定することができる。これは語義の問題であるが、同時

に、その動詞が表現する過程にも関係する。つまり、作為動詞が表現する過程と *machen* によって書き換えられた場合とが、同一のものであるかという問題である。作為動詞の「人間と事物への適用範囲」を考えた場合、それは単に人間を目的語とするか、事物を目的語とするかという問題に終わらない。それは結果的な見方にすぎない。作為動詞は、主語によって引き起こされ、時間線上の動作過程の中で、その作用が目的語に及ぶ、その変化と作用のモメントを「作為」の観点から見ようとする。そこには一つの事象が表現される。ただ、その時、人間と事物への適用を考えるならば、その事象が外在的直接的な変化であるのか、あるいは、内在的間接的な変化であるかを、慎重に区別する見方も生れる。もし、内在的な変化、つまり、人間の内面での変化であるならば、そのような内面的事象を *machen* が表現し得るかという疑問につながる。この点で、作為動詞を *machen* にパラフレーズできる語とできない語に区別するならば、単純な作為動詞の多くは可能な動詞であると言う<sup>49</sup>。J. アスホイアー (J. Abheuer) はこの区別を基礎に、作為動詞の規定と分類を試みている<sup>50</sup>。そして、接頭辞の働きを事象の内在性から見直し (*das Haar kürzen—die Qual verkürzen*)、更に、同一の動詞が求める目的語の異同の中に、より間接的作為の観点を求める<sup>51</sup>。 *die Kenntnisse vertiefen—einen Graben vertiefen*, jn. von seinen Fesseln *befreien—jn. von seinen Leidenschaften befreien*。ここでその精神的 content に直接に触れるつもりはない。しかし、仮にそのような内容的価値の差が含まれているのであれば、それは語の語義とどのように関係し、また、その区別を明白に意識できるものであるのか、それは必ずしも明確ではない。作為動詞が存在すると認めるならば、それは、作為の観点が話者の言語意識の中に潜んでいることを意味する。作為動詞の内容的価値は、そのような作為が感じられるか否かによって決定される。作為動詞は形容詞の状態への変化と作用を content とする動詞であるから、基幹語である形容詞の基本的な意味内容からの



逸脱は許されない。作為動詞は基幹語の形容詞が持つ多義性の領域内にある。作為動詞はその領域内で自己を表現する。しかし、その領域の境界線は語野との接点であり、造語は多義性の極点で語野に吸収され、語彙の構成面で規定し直されよう。また、形容詞の多義性が語彙の構成に係わるものであることも言うまでもない。この点で、造語と語彙の緊密な関係を指摘できるのだが、その接点がどのように解明され得るかが明確でないように思う。今後 WS と「野」の関係を一層明確にする必要があるだろう。ただ、この点からすれば、作為動詞の内容的価値は、造語の諸手段による以上に、基幹語である形容詞の意義に負う部分が少なくないことが裏付けられていると言えよう。例えば、ver-ern の形式をもう一度見直すならば、この造語が作為動詞を特徴付けていることは言うまでもないが、同時に、この形式に関係した一連の相対する語を見付け出すことができる。

vergrößern—verkleinern, verbreitern—verengern  
verlängern—verkürzen, verdicken—verdünnen  
vermehrern—vermindern, verbessern—verschlimmern usw.

これらの語の内容は相互に規定し合い、その相互規定の中で内容的価値を決定し得ると言えよう。また、比較変化は形容詞の基本的性格であるが、形容詞が動詞化されても、その比較の観点は失われていないと考える。更に述べれば、通常この比較変化は、文法的性質の問題として処理されるが、形容詞が持つ語彙的意味とも深く関わっていることを見逃してはならないだろう。例えば、段階的な語野を構成する語は、比較の観点を提示する。gut—befriedigend—ausreichend, lau—warm—heiß。また、heutig, nächtlich, hiesig といった語の比較級はなく、絶対的観点に立つ tot, blind, stumm などの語もそうである<sup>52</sup>。この点から作為動詞の-ern の語を観察すれば、言わば形容詞という範疇の中心的な語によって

造り出されているのではないかと推察する。また、この造語過程での形容詞と動詞との対応した関係は統語面でも考察される。最近の K.-E. ゾマーフェルト (K.-E. Sommerfeldt) の研究から例を借りれば、形容詞 *schuldig* は語の多義に応じて結合価を異にする<sup>53</sup>。

*schuldig*
 $\left\{ \begin{array}{l} \langle \text{zu geben verpflichtet} \rangle / 3 \text{ 価} \\ \text{Er ist ihm Dank schuldig.} \\ \langle \text{verantwortlich} \rangle / 1 + (1) \text{ 価} \\ \text{Der Angeklagte ist des Mordes schuldig.} \end{array} \right.$

これに対して動詞 *beschuldigen* は  $\langle \text{verantwortlich} \rangle$  の意義の中で形容詞 *schuldig* と対応した関係を示す<sup>54</sup>。

Der Staatsanwalt beschuldigt den Angeklagten des Mordes.

形容詞 *schuldig* の主格は他動詞 *beschuldigen* の対格目的語の位置に置かれ、*des Mordes* はどちらの場合も同様に随意的補足成分となっている。このような造語に伴う品詞較換と、そこでの語彙面と結合価の関係は、意味論的な述語の働きとして、E. コセリウ (E. Coseriu) も語野との関係から触れているところであるが<sup>55</sup>、今日まで十分に解明されていない領域ではないかと思われる。この点から見ても、形容詞と造り出された作為動詞との関係、また、形容詞という範疇との関係が究明されねばならないだろう。

## 5

以上、不十分ながら、ヴァイスゲルバーの WS を出発点にして形容詞から造られる作為動詞について考えてみた。語の内容的価値を決定するの

は容易ではないだろう。blühen に対して、erblühen の語が持つ価値が、「花咲く」といった語彙の意味だけであると断言することはできず、また、表現された過程をどの程度に独立した領域として意識することができるのか。一つの試みとして「意味特徴」に可能性を求めることも考えられよう。最後にこの点について触れておきたい。今日、意味内容に関する研究は厳密化、形式化、簡素化の要請を受けている。これは意味特徴の概念となって現れている。意味特徴に対する指摘としては次の三つの点を挙げることができよう<sup>56</sup>。つまり、意味特徴は 1) 言語の内容面に限定され、もはやそれ以上分解できない最小単位<sup>57</sup> であり、2) この最小単位は対象言語と厳しく一線を画したメタ言語に属し、3) その数は一言語が有する語数よりも少なく見積もることができる。これは、厳密化・形式化・簡素化の要請を受けた意味特徴の利点でもある。だが、同時に、この基本的性格がそっくりそのまま意味特徴に対する批判にもつながる<sup>58</sup>。特に、言語が言語によってしか説明できない以上、その循環性の輪は断ち難い。また、意味特徴間の関係の明確化は当面の課題であろう。意味特徴は「語」を「特徴」に分解するところに始まる。しかし、分解という手法が新しいのではない。その主眼は分解による語彙の全体あるいは部分への体系化にある。これは意味特徴が持つ最も有意義な面だと思う。コセリウは語が持つ位置的価値を「対立する語彙素のパラディグマ」<sup>59</sup>と解釈した。この簡潔な定義は体系化への新しい可能性を開いたと言えよう。だが、語彙の機能がパラディグマであるなら、それはそのジュンタグマとも関係する。この点で言えば、意味特徴は語彙面での成果に比べて、文法面での成果はまだ余り上がっていないとも指摘される。しかし、例えば、形態素 -e (ich lerne) がその形の中に「直説法」、「1人称」、「単数」、「現在」の意義素を含み、そのそれぞれの意義素が「話法」、「人称」、「数」、「時称」の体系との関係から、-e の「意味」を構成すると仮定できるなら<sup>60</sup>、その文法面への適用も考えられる。拙論と関連するところでは、造語過程での品詞転換、また

は、そこでの語彙的単位がもつ結合価の変化に意義素がどのように関係するのかという問題も設定できる。しかし、動作体様などの範疇がどの程度に客観的事実として把握でき、また、それは普遍性を持つものであるのか、あるいは、個別的な言語事実であるのかという疑問が残る。特に、動詞は語彙的意味と共に、このような動作体様などにも関係する複雑なものである。ゾマーフェルトは動作体様を意義素分析の対象としている<sup>61</sup>。しかし、bezahlen を意義素 [Geld] によって zahlen から区別できると仮定したとき<sup>62</sup>、besteigen が意義素 [Gipfel] を含む持つと考えられるだろうか。ヴァイスゲルバーはこのような接辞が生み出す差に対して、言わば精神面を強く押し出しながら考察を試みた。意味研究の形式化の中で、その接辞などの働きをどのように究明してゆくべきか、それは極めて興味深く、意義のあるものだと思う。

## 注

- 1 Vgl. W. Fleischer, *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, Leipzig 1976, S. 318. H. Wellmann, *Verbbildung durch Suffixe*. In: *Deutsche Wortbildung 1-Das Verb. Sprache der Gegenwart 29*, Düsseldorf 1973, S. 97.
- 2 W. Henzen, *Deutsche Wortbildung*, Tübingen 1957, S. 103-108. 212f.
- 3 J. Erben, *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre*, Berlin 1983, S. 67f. 70-71. Duden, *Die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Der große Duden Bd. 4, Mannheim 1973, S. 348f.
- 4 L. Weisgerber, *Verschiebungen in der sprachlichen Einschätzung von Menschen und Sachen*, Köln und Opladen 1958, S. 38-42.
- 5 Vgl. H. Bußmann, *Lexikon der Sprachwissenschaft*, Stuttgart 1983, S. 137-138.
- 6 Weisgerber, a. a. O., S. 12. 38. 訳語に関しては、例えば、関口は kommen と bringen の対立から Faktitiv を「自働相」、Kausativ を「作為相」と訳出している（関口存男『冠詞』第1巻「定冠詞篇」昭和35年 三修社 836ページ）。本稿では十分ではないが、比較的一般的な「作為」の語を当てた。
- 7 用語そのものはヴァイスゲルバーのものではない。Nische は K. パルディングー (K. Baldinger), Wortstand は H. L. シュトルテンベルク (H. L. Stolten-

- berg) に始まる。
- 8 Vgl. L. Weisgerber, *Vier Stufen in der Erforschung der deutschen Sprache*. In : *Wirkendes Wort* 19, Düsseldorf 1969, S. 145-163.
  - 9 「野」の理論の歴史については次の文献を参照のこと。R. Hoberg, *Die Lehre vom sprachlichen Feld*, Düsseldorf 1973. H. Geckeler, *Strukturelle Semantik und Wortfeldtheorie*, München 1971, S. 84-204.
  - 10 Vgl. Duden, a. a. O., S. 439-441.
  - 11 Vgl. H. Brinkmann, *Die deutsche Sprache*, Düsseldorf 1971, S. 235.
  - 12 Weisgerber (1969), a. a. O., S. 153.
  - 13 Brinkmann, a. a. O., S. 227.
  - 14 Weisgerber (1958), a. a. O., S. 11f.
  - 15 Vgl. G. Seyfert, *Zur Theorie der Verbgrammatik*, Tübingen 1979, S. 293f.
  - 16 Vgl. Wellmann, a. a. O., S. 107.
  - 17 Weisgerber, a. a. O., S. 39-40.
  - 18 高橋輝和「ゴート語における Aktionsart と Aspekt」, 『ドイツ文学』48号 1972年東京 49ページ。
  - 19 同上書 47-48ページ。H. Renicke, *Die Theorie der Aspekt und Aktionsarten*. In : PBB 72, 1950, S. 183f.
  - 20 同上書(高橋) 49ページ。
  - 21 22 Weisgerber, a. a. O., S. 42.
  - 23 24 Brinkmann, a. a. O., S. 248-249.
  - 25 高橋輝和 前掲書 49ページ。
  - 26 Vgl. J. Abheuer, *Die formbezogene und semantische Struktur verbal-transitiver Ableitungen zu Adjektiven*. Teil 1. In : *Muttersprache* 81, Mannheim/Zürich 1971, S. 6-7.
  - 27 Brinkmann, a. a. O., S. 226f. 566.
  - 28 Abheuer, a. a. O., S. 9.
  - 29 Brinkmann, a. a. O., S. 237.
  - 30 Weisgerber, a. a. O., S. 40.
  - 31 Brinkmann, a. a. O., S. 235.
  - 32 Vgl. Abheuer, a. a. O., S. 8.
  - 33 Ibid. S. 8-9.
  - 34 Brinkmann, a. a. O., S. 236.
  - 35 Weisgerber, a. a. O., S. 40. Anm. 22.
  - 36 37 Brinkmann, a. a. O., S. 232.
  - 38 Weisgerber, a. a. O., S. 105.
  - 39 Ibid., S. 21-35.

- 40 Ibid., S. 39. 115f.
- 41 Ibid., S. 41.
- 42 Brinkmann, a. a. O., S. 239.
- 43 Ibid., S. 231f.
- 44 Weisgerber, a. a. O., S. 106.
- 45 Duden, a. a. O., S. 348-352.
- 46 Vgl. Abheuer, a. a. O., S. 13.
- 47 Weisgerber, a. a. O., S. 41.
- 48 Vgl. Wellmann, a. a. O., S. 106.
- 49 50 51 アスホイアーは作為動詞の内容的価値を接辞と形容詞の連関 (Standnische) ととらえ、その価値を動作過程の直接性と間接性を基礎にして、三つの基本的なクラスに分類している。
1. machen+形容詞 (befestigen usw.)
  2. bewirken, daß etwas so und so wird (verschärfen usw.)
  3. darstellen (veranschaulichen usw.)
- このような分類も形容詞の意義に負う部分が少なくないと言えよう。J. Abheuer, *Die formbezogene und semantische Struktur verbal-transitiver Ableitungen zu Adjektiven*. Teil 2. In: Muttersprache 81, Mannheim/Zürich 1971, S. 65-76.
- 52 Vgl. M. D. Stepanova, G. Helbig, *Wortarten und das Problem der Valenz in der deutschen Gegenwartssprache*, Leipzig 1981, S. 86, 99-101.
- 53 K.-E. Sommerfeldt, H. Schreiber, *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive*, Leipzig 1983, S. 376-377.
- 54 K.-E. Sommerfeldt, *Zur Semantik und Valenz deutscher deadjektivischer Verben, unter besonderer Berücksichtigung der Faktitiva*. In: G. Schieb, W. Fleischer, R. Große, G. Lerchner (Hrsg.), *Beiträge zur Erforschung der deutschen Sprache 3*, Leipzig 1983, S. 16.
- 55 E. コセリウは、造語は語野の構造を前提とし、更に語彙の「文法化」に対応するので、「二次的」な構造であると言う。更に、形容詞から造られた作為動詞のような造語を「発展」(Entwicklung)と呼び、品詞転換された語は語彙素の述語的機能を内包していると考察している。E. Coseriu, *Die funktionelle Betrachtung des Wortschatzes*. In: *Probleme der Lexikologie und Lexikographie*. Sprache der Gegenwart 39, Düsseldorf 1976, S. 21-22.
- 56 K. Sprengel, *Über semantische Merkmale*. In: D. Kastovsky (Hrsg.), *Perspektiven der lexikalischen Semantik*, Bonn 1980, S. 150-151.
- 57 最小単位かどうかについては確定的でない。Vgl. *Einführung in die Grundfragen der Sprachwissenschaft*. Von einem Autorenkollektiv unter Lei-

- stung von W. Bondzio, Leipzig 1980, S. 84.
- 58 Sprengel, a. a. O., S. 151f.
- 59 E. Coseriu, *Lexikalische Solidaritäten*. In: *Poetica* 1, 1967, S. 294.
- 60 Vgl. Stepanova, Helbig, a. a. O., S. 74.
- 61 Sommerfeldt, a. a. O., S. 7.
- 62 Stepanova, Helbig, a. a. O., S. 140.

# Die Faktitiva

—zum Bereich ihres Wortstands—

Yasuyuki Sugatani

Die deadjektivischen Verben werden in zwei Hauptgruppen untergliedert: die sog. Faktitiva und die Inchoativa. Man kann ferner eine kleine Gruppe hinzurechnen, die sog. Zustandsverben. Diese Gruppierung beruht grundsätzlich darauf, daß sich die Ableitungen von Adjektiven mit den Verben *machen*, *werden* und *sein* umschreiben lassen. Doch ist die inhaltliche Unterschiedlichkeit nicht zu übersehen. Besonders bei den faktitiven Verben ist es fraglich, ob sich die inhaltliche Ausprägung einzelner Wörter ohne weiteres mit *machen* explizieren läßt.

Die Bildungsweisen zu faktitiven Verben sind sehr vielfältig, und formal scheinen sie nicht einheitlich zu sein. Inhaltlich lassen sie sich jedoch als Gemeinsamkeit von Wortnischen verschiedener Bildung zusammenfassen. Man kann also sagen, daß sie miteinander einen Wortstand konstituieren. Der Begriff Wortstand ist ein Bezugspunkt, die Ableitungen zusammenzufassen, die inhaltlich in einer gleichen Richtung motiviert sind. Unter diesem Gesichtspunkt sind die faktitiven Verben dadurch zu charakterisieren, daß sie jn. oder et. in einen Zustand versetzen, der schon im Basisadjektiv genannt ist. Sie bezeichnen zeitliche Abläufe. Im verbalen Prozeß heben sie zwei Momente hervor, d. h. die Zustandsveränderung und -bewirkung. Dies ist ein erhebliches Charakteristikum dieser Verben. Bei einer solchen Sehweise werden nicht nur einfache Ableitungen, sondern auch präfigierte und suffigierte Verben in dem Wortstand faktitiver Verben zusammengestellt.

Hinsichtlich dieser Inhaltsrichtung faktitiver Verben wird



darauf hingewiesen, daß sie primär mit *machen* umschrieben werden, weil ihre Inhalte insgesamt als Bewirkung eines adjektivischen Inhalts faßbar sind. Aber es ist fraglich, ob die Inhaltsausprägungen einzelner Verben mit dem Muster: Adjektiv +machen, genauer wiedergegeben werden können. So unterscheidet J. Aßheuer in seinen Arbeiten die faktitiven Verben im einzelnen nach drei Umschreibungen im Hinblick auf die Standnische: die Verben der *machen*-Umschreibung, die der *bewirken*-Umschreibung und die der *darstellen*-Umschreibung. Solche Unterschiede ergeben sich aus der Art, die bei der Überführung in den adjektivischen Zustand erkennbar wird. Andererseits machen die Möglichkeiten dieser Bedeutungsunterschiede explizit, daß die Semantik des Adjektivs wichtig ist, weil sich solche Unterschiede nicht nur aus den Bildungsweisen, sondern auch aus den Bedeutungen der Adjektive ergeben.

In welcher Beziehung stehen sie nun zur lexikalischen Bedeutung? Wenn man annimmt, daß es die Faktitiva gibt, so bedeutet es, daß es den faktitiven Gesichtspunkt im Sprachbewußtsein des Sprechers gibt. Der Inhaltswert der faktitiven Verben hängt dann davon ab, ob solch ein faktitiver Gesichtspunkt bewußt ist oder wird. Da die inhaltliche Ausrichtung dieser Verben dadurch charakterisiert ist, daß sie die im Adjektiv genannte Zustandsveränderung und -bewirkung bezeichnen sollen, bestehen diese Verben im Bereich der Polysemie des Ausgangsadjektivs. Aber die Grenze dieses Bereichs berührt sich mit dem Wortfeld, und am Ende können Bildungen ins Wortfeld absorbiert werden. Der Wortstand überschneidet sich hier mit den Zügen des Wortfelds.

Wie soll man aber eine solche Nahtstelle der beiden Begriffe klären? Ich glaube, L. Weisgerber muß sich der inhaltlichen Gliederung der Sprache bewußt gewesen sein, als er den Wortstand als Gegenstück des Wortfelds in die Wortbildungslehre einführte. Es sei gestattet, darauf hinzuweisen, daß Wörter in diesen zwei Begriffen als inhaltlich gemeinsam gefaßt werden

können und ihre Eigenschaften als ein Teil des Sprachsystems spezifiziert werden. Die Wortfelder werden heute mit Hilfe der Semanalyse erfolgreich erforscht. In diesem Bereich erweist sich die Semanalyse als sinnvoll. Die Semanalyse hat den Vorzug, Bedeutungen genauer darzustellen und zu formulieren. Es ist aber nicht einfach, den Inhaltswert eines Wortes zu bestimmen. Besonders beim Verb treffen wir auf Schwierigkeiten. Das Verb entsteht nicht nur aus der lexikalischen Bedeutung, sondern auch aus dem Komplex von Modus, Tempus und Aktionsart. In seinen neuen Untersuchungen nimmt K.-E. Sommerfeldt an, daß sich unter den Semen die Semantik der Aktionsarten befindet. Es scheint mir jedoch fraglich, ob die Semanalyse eine Nahtstelle zwischen Wortstand und Wortfeld klären kann. Aber gerade für die Semanalyse selbst ist die Frage wichtig, ob sie diesen Fragenkomplex lösen kann.